

# 町の洗濯婦による布施物語

——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第7章和訳——

平 岡 聡

## 0. はじめに

ここに紹介するのは『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(*Divyāvadāna*, 以下 Divy.) 第7章「ナガラ・アヴァランビカー・アヴァダーナ」の和訳である。この説話では二人の町の洗濯婦 (*nagarāvalambikā*) が主人公となって話が展開する。最初に登場する洗濯婦は癩病にかかって今にも死にそうなのであるが、彼女は仏弟子のカーシャバに出会すると、浄心を以て自分の持っていた重湯を彼に布施し、死後、兜卒天に生まれ変わる。一方、二人目の洗濯婦も貧しさに打ちひしがれてはいたが、少量の油を手に入れ、浄心を以て世尊に灯明の布施をした後、世尊のもとで「未来世に釈迦牟尼世尊とおなじようになりたい」という誓願を立て、その誓願が成就することを世尊が予言している。

この説話で面白いのはプラセーナジット王がピエロ役を演じていることである。彼は財力にものを言わせて、一週間も世尊に食事を供養したり、百千もの油壺を用意して灯明の環を布施しているが、それらの王の布施が、質素ではあるが心のこもった二人の布施（重湯と粗末な灯明）と対比されていて、この説話は「何を布施するか」よりも「どのような心で布施するか」ということを強調しているようである。即ち浄心 (*cittaprasāda*) の功德が賞賛されているのである。

またプラセーナジット王の過去物語が取り込まれていることも、この説話の特徴づける一つの要素となっていると言えよう。

## 1. 翻訳に際して

### 梵文原典

底本として用いたのは以下のエディションである。

*Divyāvadāna: Collection of Early Buddhist Legends*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886; Reprint Amsterdam: Oriental Press/Philo Press, 1970, pp. 80–91.

また Divy. には根本説一切有部律 (*Mūlasarvāstivādinaya*, 以下 MSV) との間に数多くのパラレルが存在し、この説話も薬事 (*Bhaiṣajyavastu*) に平行話が見られるので、翻訳に当たっては常にこれを参照し、重要と思われる異読は脚注に示した。参照したのは次のテキストである。

*Gilgit Manuscripts*, edited by N. Dutt, 4 vols., Srinagar (I–III) and Calcutta (IV), 1942–1950; Reprint Delhi: Satguru Publications, 1984, vol. III-1, pp. 79. 3–91. 6.

### 蔵 訳

*The Tibetan Tripitaka*, Taipei Edition, 1991, No. 1 Kha 162b5–169a2.

*The Tibetan Tripitaka*, Peking edition, 1954–1959, No. 1030 Ge 151a2–157a4.

### 漢 訳

『根本説一切有部毘奈耶藥事』巻第十二（大正24, pp. 53c16–56a9）

### 翻 訳

翻訳は榊亮三郎の和訳が一つ存在するだけである。

榊亮三郎「「ディヴィヤヴァダーナ」の研究並びに翻訳」『六条学報』134–138 and 140–162, 1912–1915, pp. 177–192（但し Divy. p. 90. 12 まで）

### その他

この説話の中にはブラセーナジット王の過去物語が説かれていることは既に指摘したが、この過去物語は『ジャータカ・マラー』第3章や『ジャータカ』415にも説かれている。

*Jātakamālā*, edited by H. Kern, Harvard Oriental Series, vol. 1, Boston, 1891, pp. 14–18.

*Jātaka*, edited by V. Fausbøll, 7 vols. (vol. VII: Index), London: Pāli Text Society, 1877–1897, vol. 3, pp. 405–414.

## 2. 「ナガラ・アヴァランビカー・アヴァダーナ」和訳<sup>1)</sup>

### 現在物語 I

[80] その時、世尊はコーサラ地方を遊行しながら、シュラーヴァスティーに到着され、シュラーヴァスティー郊外にあるジェータ林・アナータピンダダの園で時を過ごしておられた。長者アナータピンダダは、世尊がコーサラ地方を遊行するうち、シュラーヴァスティーに到着し、シュラーヴァスティー郊外にあるジェータ林・アナータピンダダの園で時を過ごしておられると聞いた<sup>2)</sup>。そして聞き終わると、世尊がいらっしゃる所に近づいた。近づくと、[長者]は世尊の両足を頭に頂いて礼拝して、一隅に座った。一隅に座った長者アナータピンダダを、世尊は法話によって教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられた。法話によって[長者を]様々な仕方で教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられると、[世尊]は沈黙された。長者アナータピンダダは座から立ち上がると、上衣を右肩に懸け、世尊に向かって合掌礼拝すると、次のように言った。

[81]「世尊は明日、比丘僧伽と共に、[我が]屋敷内で食事されることを私にお許し下さいませ」と。

世尊は沈黙を以て長者アナータピンダダに同意された。長者アナータピンダダは、世尊が沈黙を以て同意されたのを知ると、世尊の説かれたことに喜び、満足して、世尊の両足を頭に頂いて礼拝すると、世尊のもとから退き、自分の家に戻った。戻ると、門番の男に告げた。

1) この題名に出てくる *nagarāvalambikā* の *avalambikā* という語が先ず問題になる。本文中では4回出てくるが (p. 82.11, 28, 89.20-21, 26-27), エジャートンの仏敎混淆梵語辞典 (BHSD) によると、この語は *ava√lamb* の派生語であるから、「吊り下げる」という意味を基本に持つ語であり、従って「衣類を吊り下げて乾かす」ことを職業とする者、即ち「洗濯屋 (ここでは女性名詞として使われているから、洗濯婦)」を意味するのではないかと推察している。彼が根拠としているのは、『マハー・ヴァストゥ』見られる *pāmsukūlam vṛkṣaśākhāye olambitvā*「糞掃衣を木の枝に吊り下げると」(Mv iii. p. 311.11) という用例である。次に Tib. ではどのようにこの語を解釈しているかを確認するためにその対応箇所を見ると、前半は *grong phyi nyug ma* (D. 163b4, 164a2; P. 151b8, 152a5) と訳し、後半は *phyi* を省略して *grong nyug ma* (D. 168a2, 4; P. 156a7, 156b2) と訳している。*grong* は「町」を意味するから、Skt. の *nagara* に相当するが、問題は *phyi nyug ma* 或いは *nyug ma* である。*nyug pa* は「触れる」、「探し求める」等の意味があるが、それがここで具体的に何を意味するのかは不明である。一方、漢訳では前半を「癩女」(p. 54a14, 24), 後半は「貧女」(p. 55c9) または「乞女」(p. 55c12) とし、Skt. 原典に忠実な訳語とは言えない。今は原典の意味を尊重したエジャートンの読みを採用し、「町の洗濯婦」と訳すことにする。

2) Divy. (p. 80.14-16) ではアナータピンダダの聞いた内容が間接話法になっているが、Tib. では *mnyan yod na rgyal bu rgyal byed kyi tshal gyi bdag gi kun dga' ra ba na bzhugs so zhes thos so* 『「シュラーヴァスティーにあるジェータ太子の林の私の園林に住しておられる」と聞いた」(D. 162b6; P. 151a3) とし、直接話法で訳している。

「おい、お前、仏を上首とする比丘僧伽〔の皆様〕が食事を終わられるまで、絶対に外道の者達が〔屋敷内に〕入るのを許してはならんぞ。その後で〔私〕は外道の者達〔が屋敷内に入るの〕を許そう」と。

「かしこまりました、ご主人様」

と〔言って〕門番の男は長者アナータピンダダに同意した。

長者アナータピンダダは、その同じ日の夜、清浄で美味なる硬・軟〔二種〕の食物を用意すると、次の日の朝〔早く〕起きて〔世尊と比丘達の〕座席を設け、水瓶<sup>3)</sup>を設置すると、世尊のもとに使者を送り、時を告げさせた。

「大徳よ、お時間です。食事の用意が出来ました。世尊は今が〔お出かけになる〕時間であるとお考え下さい」と。

すると、世尊は午前中に衣を身に纏い、衣鉢を持つと、比丘衆に取り囲まれ、比丘僧伽に敬われながら、長者アナータピンダダが食事を用意した場所に近づかれた。近づかれると、〔世尊〕は比丘僧伽の前に設けられた座に座られた。その時、長者アナータピンダダは仏を上首とする比丘僧伽〔全員〕が心地よく座り終えたのを確認すると、清浄で美味なる硬・軟〔二種〕の食物によって手ずから〔世尊を〕喜ばせ、満足させた。清浄で美味なる硬・軟〔二種〕の食物によって手ずから〔世尊を〕様々な仕方でも喜ばせ、満足させた後、世尊が食事を終え、手を洗って<sup>4)</sup>、鉢を片付けられたのを確認すると、〔長者アナータピンダダ〕は一段低い席を取り、法を聞くために世尊の前に座った。

その時、同志マハーカーシャパは髪と髭とをぼうぼうに伸ばし、ボロボロの衣を身に纏って、或る森の座臥処からジェータ林に向かった。彼はジェータ林に誰もいないのに気付いた。彼は精舎の財産管理人 (upadhivārika) に尋ねた。

「仏を上首とする比丘僧伽は何処におられるのか」

〔彼〕は答えた。

「〔世尊〕は長者アナータピンダダに招待されたのですよ」と。

3) 原語は *udakamani* (p. 81.12) であり、BHSD によると、これ全体で「水瓶」を意味するが、Tib. ではこれを *nor bu'i chu snod* 「宝珠の水瓶」(D. 163a3; P. 151a7) としているから、*mani* を重複して訳していることになる。

4) Skt. では *dhautahastam* 「手を洗って」(Divy. p. 81.23; MSV p. 80.1) を意味するが、Tib. では *phyag bcabs te* (D. 163a6; P. 151b2) となっている。チャンドラ・ダスはこれを「密かに礼をすること」(Tibetan English Dictionary) と説明している。これに従うと、仏陀が自分を食事に招待してくれたアナータピンダダに対して密かに礼をしたことになるが、仏陀が他の人に礼をすることは考えられない。*bcabs* は 'chab pa 「隠す」の過去形であるから、「お手を隠して」とも読めるのであるが、Skt. の *dhautahastam* の訳とは考えがたい。Tib. 訳者が Skt. の *dhauta* を他の言葉と読み違えたのではないかと考えられる。

彼は考えた。

〈その同じ場所に行って、[82][私も] 食事を頂くとしよう。そして仏を上首とする比丘僧伽にお仕えしよう〉と。

彼は長者アナータピンダダの家に行った。すると<sup>5)</sup>門番が〔彼〕に言った。

「聖者よ、ちょっとお待ち下さい。〔中には〕お入りにできません<sup>6)</sup>」

「どうしてだ」

「長者アナータピンダダは『仏を上首とする比丘僧伽〔の皆様〕が食事を終えられるまで、絶対に外道の者達が〔屋敷内に〕入るのを許してはならんぞ。その後で〔私〕は外道の者達〔が屋敷内に入るの〕を許そう』と命じられたからです」

その時、同志マハーカーシャパは考えた。

〈信心深い<sup>7)</sup>バラモンや長者達は、私が沙門・仏陀の弟子であることを御存じないようだが、それならそれでこの私には大変都合だ (tasya me lābhāḥ sulabhā yan...). 行こう。〔私〕は貧しい人を助けることにしよう<sup>8)</sup>〉

このように考えると、〔彼〕は園林に出掛けた。彼は考えた。

〈今日私は誰を助けようか<sup>9)</sup>〉と。

間もなく、癩病にかかり、苦痛に打ちひしがれ、体中が膿んでいた、或る町の洗濯婦が物乞いして〔辺りを〕うろついていた。彼は彼女のもとに近づいた。ところで彼女には乞食で手に入れた重湯<sup>10)</sup>があったが、彼女は落ち着いた立ち居振る舞いによっ

5) 原典には *niveśanam gataḥ/ ato dauvārikenoktaḥ* (p. 82.2-3) とあるが、この *ato* は *gato* の誤りではないかと榊亮三郎はその訳の中で指摘する (p. 178)。MSV の相当箇所を見ると、*niveśanam gataḥ/dauvārikenoktaḥ* (p. 80.9) とし、問題の語を欠いている。Tib. を見ると、*khyim du song ba dang/ sgo srungs kyis smras pa* 「家に行くと、門番に言われた」(D. 163b1; P. 151b5) とあり、また漢訳でも「速時詣彼。其守門人告言」(p. 54a4) として、いずれも MSV に一致しているので、榊の校訂を指示する資料はないが、また Divy. の *ato* に相当する訳語も見い出せない。今は原典に忠実に訳し、これを副詞として理解しておく。

6) Divy. では *ārya tiṣṭha mā pravekṣyasi* (p. 82.3) となっているが、MSV では *ārya mā pravekṣyasi* (p. 80.9) とし、*tiṣṭha* を欠いている。Tib. を見ると、*'phags pa nang du ma bzhus par gzhes shig* 「聖者よ、中には入らずに〔そこで〕お待ち下さい」(D. 163b1; P. 151b5) となっており、Divy. の Skt. に近い。因みに漢訳は「聖者。勿入於中」(p. 54a5) としているから、MSV の Skt. に近いようだが、これだけでは判断できない。

7) Divy. では「バラモンや長者達」を修飾する *śrāddhā* (p. 82.7) という形容詞があるが、MSV (p. 80.13) とその Tib. (D. 163b3; P. 151b6) ではその訳語を欠いている。ところが漢訳では「淨信婆羅門。長者居士」(p. 54a8-9) とし、Divy. の Skt. に一致している。

8) ここを Divy. は *anugrahaṃ karomi* (p. 82.9) とし、MSV (p. 80.15) は *anukampāṃ karomi* とする。また Tib. (D. 163b3; P. 151b7) では *snying rje bya'o* とし、漢訳では「哀愍」(p. 54a10) となっている。

9) Divy. では依然として *anugraha* (p. 82.10) を使うが、MSV (p. 80.16) はここで Divy. と同じ *anugraha* を用いる。これに伴い、Tib. も *rjes su bzung ba* (D. 163b4; P. 151b8) とし、漢訳も「愍哀」(p. 54a11) と漢字をひっくり返し、その訳風を少し変えているようである。

10) Divy. には *āyāsaḥ* (p. 82.13) とあるが、これでは意味が取れない。この語に関しては ↗

て〔人の〕心身を和ませる同志マハーカーシャパを見た。彼女は考えた。

〈私は、このような布施を受けるに相応しい人を供養しなかったら、そのことによって、きっと私はそれに見合った〔悪い〕状態 (samavasthā) に陥るでしょう。もしも同志マハーカーシャパが哀れみを垂れて私から〔この〕重湯を受け取って下さるならば、私は彼に差し上げることにしましょう〉と。

すると同志マハーカーシャパは彼女の心を〔自分の〕心で知って、〔彼女に〕鉢を差し出した。

「御婦人よ、もしもあなたに残〔飯〕しがあるなら、この鉢に入れて頂けないか」と。

すると彼女は心を淨らかにし、その鉢に〔重湯を〕布施したが、その時〔鉢の中に〕蠅が入ってしまった。彼女はそれを取り除こうとして、その重湯の中に自分の〔膿だらけの〕指を入れてしまったのである。〔彼女〕は考えた。

〈たとえ聖者は私の心を傷つけないように〔私が布施したその重湯を〕捨てるようなことはなさらないにしても、お食べになることはないでしょう〉と。

その時、同志マハーカーシャパは、彼女の心を〔自分の〕心で知ると、ちょうど彼女に見えるように、或る壁の土台の近くで〔それを〕ぺろりと食べてしまった<sup>11)</sup>。彼女は考えた。

〈確かに聖者は私の心を傷つけないように〔その重湯を〕お食べになったが、その食物だけで〔充分な〕食事をされたとは思われないでしょう〉と。

その時、同志マハーカーシャパは、彼女の心を〔自分の〕心で知ると、その町の洗濯婦に次のように言った。

「御婦人よ、喜びなさい。あなたがくれた食物によって、私は一昼夜を過ごせるであろう」と。

〈聖者マハーカーシャパは、〔83〕私の食物を受け取って下さった〉

\\Divy. の各写本に混乱が見られ、いずれの読みも文脈に沿わない。BHSD によると、これは ācāmah と読むべきであるとしている。Tib. を見ると、'bras khu「米汁」(D. 163b4; P. 151b8) とし、漢訳も「米泔」(p. 54a14) とし、エジャートンの訂正を支持している。また Divy. ではこのあと ācāma (p. 82.17) という語が見られるし、MSV にも ācāmah (p. 80.18) とあるから、この āyāsah は ācāmah とみて間違いなからう。

11) この部分の Skt. は Divy. (p. 82.24-25) も MSV (p. 81.8) も anyatamaṃ kuḍyamūlaṃ niśritya paribhuktam となっているが、ここに相当する Tib. を見てみると、'bab pa'i rtsig drung zhig tu 'dug nas 'thungs pa dang「崩れかけた壁の近くに座って〔それを〕口にし」(D. 164a1; P. 152a4) とあり、下線を施した訳語に相当する Skt. が見あたらない。漢訳では「於牆下座。而食其泔」(p. 54a22) とし、Tib. のように「壁」を修飾する訳語はないが、「座って食べた」ことは Tib. と共通している。

という非常に大きな喜びが彼女に生じたのであった。その後〔彼女〕は同志マハーカーシャパに対して心を浄らかにしてから<sup>12)</sup>臨終を迎え、兜卒天衆に生まれ変わったのである。神々の主シャクラは、彼女が重湯を布施し、心を浄らかにして臨終を迎えたのを見たが、〔彼女〕が何処に生まれ変わったのかは分からなかった。彼は地獄を見渡しはじめたが、〔彼女の姿は〕見えなかった。〔続いて〕畜生〔界〕、餓鬼〔界〕、人間〔界〕、四大王天、そして三十三天に到るまで〔見渡したが、彼女の姿は何処にも〕見えなかった。何故なら、諸天の知見は下には働くが、上には働かないからである。その時、神々の主シャクラは世尊がいらっしゃる所に近づいた。近づくと、詩頌を唱えて質問した<sup>13)</sup>。

「偉大な人物カーシャパが托鉢していた時、〔その〕カーシャパに重湯を施したあの女は、何処で楽しみを享受しているのですか」(1)

世尊は言われた。

「かの兜卒という天は、あらゆる欲望の対象が手に入る所であるが、カーシャパに重湯を施した女は、そこで楽しみを享受している」(2)と。

その時、神々の主シャクラは次のように考えた。

〈〔世間の〕人々は、福と非福〔の果報〕を自分の眼ではっきり確かめられるわけ

12) 原文は *cittam abhiprasāḍya* (p. 83. 1-2) であるが、Divy. には「心を浄らかにする」ことが悪業の消滅をもたらすという用例が幾らか存在する。これは授記を扱う説話の定型句に見られる。釈尊が誰かを授記する場合には微笑を現し、その釈尊の口元からは光線が放たれるのであるが、その光線は地獄と天界とを巡り行く。その後、釈尊は地獄の住人に浄信を生ぜしめんがために化仏を地獄に送り込むのであるが、それを見た地獄の住人達は心を浄らかにし、それによって悪業が減するというのである。第4章の用例を紹介しよう。

*te nirmite cittam abhiprasāḍya tan narakavedanīyaṃ karma kṣapayitvā devamanuṣyeṣu pratisaṃdhiṃ grhṇanti* (Divy. p. 68. 9-11)

彼らは化〔仏〕に対して心を浄らかにすると、地獄で〔苦を〕感受すべき〔悪〕業を滅尽して、天界や人間界に生まれ変わった。

ここでは悪業の消滅とは関係ないが、彼女を兜卒天への再生へと導く原動力となっている。またこの説話の後半でも「心を浄らかにする」ことの功德が再び取り上げられている。なお、この問題に関しては、拙稿『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅』（『佛教研究』21, 1992, pp. 113-132, esp. p. 124）を参照されたい。

13) 文脈からして、シャクラが質問する相手は釈尊であることは明らかであるが、Divy. ではそれが明記されていない (p. 83. 9)。これに対し、MSV には *bhagavantam* (p. 81. 21), また Tib. にも *bcom ldan 'das la* (D. 164a5; P. 152b1) という語が見られる。漢訳は「以頌請曰」(p. 54b4-5) とし、Divy. と一致している。

ではないのに、布施をして功德を積んでいる。私は福德〔の果報〕を自分の眼ではつきり確かめて、自分の福德の果報に安住しているのに、どうして〔この私〕が布施をしないでおれようか。〔どうして〕福德を積まないでおれようか<sup>14)</sup>。かの聖者マハーカーシャパは、貧しくて身寄りがなく、哀れで物乞いするような人に対して哀れみを垂れるお方である。いざ私は彼に食物を布施することにしよう

このように考えると、〔ジャクラ〕は貧しい人々の〔住んでいる〕通りに、今にも崩れ落ちそうで、鳥が住み着き<sup>15)</sup>、見栄えの悪い家を化作し、そして自分も織師に変身し、髪はぼうぼうで、古汚い衣に身を包み、擦り切れた手足で衣を縫いはじめた。〔ジャクラの妻である〕天女シャーチャーも織師の妻になりすまして織物をはじめた。そして彼女の側には天の甘露<sup>16)</sup>が用意してあった。その時、貧しくて身寄りがなく、哀れで物乞いするような人に対して哀れみを垂れる同志マハーカーシャパは〔托鉢しながら〕次第にその家へと到着した。〔84〕〔同志マハーカーシャパはこの家の〕者が苦しんでいると考え、門のところに立つと、鉢を差し出した。神々の主ジャクラは、〔その鉢を〕天の甘露で満たした。その時、同志マハーカーシャパは次のように考えた。

〈彼には天の甘露や食物がある一方、家の広さはこの〔程度〕である。〔この両者は〕甚だ矛盾すると思い、我が心に疑念が生じた〉(3) と<sup>17)</sup>。

——阿羅漢の知見は、〔知りたいと思う対象に精神を〕集中しないと働かないことになっている。——

14) この表現に関して、Divy. と MSV は面白いコントラストを見せているので、両者の読みを比較してみると、次のようになる。

Divy: kasmād dānāni na dadāmi puṇyāni vā na karomi (p. 83. 18)

MSV: tasmād dānāni vā dadāmi puṇyāni vā karomi (p. 82. 8-9)

MSV の読みに従えば、「だから〔私〕は布施をし、或いは福德を積もう」と訳せるので、結果としてその意味するところは同じであるが、Tib. には *ci'i phyir sbyin pa dag mi gtang bsod nams dag mi bya* 「どうして布施をせず、福德をなさないことがあろうか」(D. 164a7-b1; P. 152b4)、漢訳には「何不惠施。修諸福業」(p. 54b12-13)とあるので、両訳とも Divy. の読みに一致している。この後、この表現が繰り返されるが (Divy. p. 84. 13-14; MSV p. 83. 12-13)、そこを見ると、いずれの Skt. も *kathaṃ dānāni na dadāmi* としているから、Divy. の読みを採用すべきであろう。

15) 原文にある *kākābhilīnakam* (p. 83. 21) は Tib. では省略されている (D. 164b1-2; P. 152b4) し、漢訳にも対応する訳語が存在しない (p. 54b15-16)。

16) 原語は *sudhā* (p. 83. 25) であって、これは *amṛta* と同じ「甘露」、即ち「飲物」を意味する。翻訳名義大集によると、これに対応する Tib. は *bdud rtsi* (5775) であるが、ここでは *zhal zas* 「食物」(D. 164b3; P. 152b6) という訳語を用いている。漢訳は「天妙食」(p. 54b18, 21)、或いは「天妙飲食」(p. 54b22) という訳語を与えている。

17) この偈は Tib. (D. 164b4-5; P. 152b8-153a1) でも漢訳 (p. 54b22-23) でも散文として扱われている。



彼は「精神を」集中しはじめると、やがて神々の主シャクラが見えた。彼は言った。

「カウシカよ、世尊・如来・阿羅漢・正等覺者は、そのお前〔の心〕に〔刺さって〕長い間 (dīrgharātra) 抜けなかった疑いと惑いという刺を根こそぎ引き抜いて下さったのに、どうしてお前は苦しんでいる人〔が布施しようとする〕のを邪魔するのだ」

「聖者マハーカーシャパよ、どうして〔私〕が苦しんでいる人の邪魔をするかという、〔世間の〕人々は福德〔の果報〕を自分の眼ではっきり確かめられるわけでもないのに、布施をして福德を積んでいる。〔しかし〕私は福德〔の果報〕を自分の眼ではっきり確かめているのだ<sup>18)</sup>。どうして〔その私〕が布施をしないでいられようか。或いは福德を積まずにおられようか<sup>19)</sup>。また世尊も

『福德はなされるべきである。福德をなさない者達は苦しむが、福德をなした者達は、この世とあの世とで楽しみを受ける<sup>20)</sup>』(4)

と言われたではないか」

それ以来、同志マハーカーシャパは、〔常に〕精神を集中させながら托鉢のために家に入ることにしたのである。さて神々の主シャクラの方は、虚空に留まり、托鉢し

18) Skt. はいずれも ahaṃ pratyakṣadarśy eva puṇyānām (Divy. p. 84.13, MSV p. 83.12) とするが、Tib. ではその後に bdag bsod nams dag mngon sum du mthong zhing rang gi bsod nams kyi 'bras bu la gnas pa 「私は福德〔の果報〕を自分の眼ではっきりと見て、自分自身の福德の果報に安住している」 (D. 164b7; P. 153a3-4) という下線を施した一節が見られる。漢訳は「我今自見」(p. 54b29)とあり、これに相当する一節は存在しない。

19) Divy. では katham dānāni na dadāmi (p. 84.13-14) とあるだけだが、MSV は katham dadāni na dadāmi puṇyāni vā na karomi (p. 83.12-13) となっている。Tib. も ci'i phir sbyin pa dag mi btang/ bsod rnam dag mi bgyid 「どうして布施をせず、福德をなさないことがあるか」 (D. 164b7-165a1; P. 153a4), 漢訳も「何不惠施。廣修諸福」(p. 54b29-c1) としている。文脈から言っても、この一節は必要であると思われるので、これを補う。

20) この偈頌に関しては、スパイエルが若干の訂正を提案している (J. S. Speyer "Critical Remarks on the Divyāvadāna," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Des Morgenlandes* XVI, Wien, 1902, pp. 103-130, esp. p. 111). 即ち原文では、

karaṇīyāni puṇyāni duḥkhā hy akṛtapuṇyatāḥ/  
kṛtapuṇyāni modante asmin loke paratra ca// (p. 84.15-16)

となっているが、下線部の二箇所をそれぞれ、akṛtapuṇyākāḥ, kṛtapuṇyā と訂正している。原文の読みに従えば、「福德をなさないこと」、「福德をなすこと」を意味し、抽象名詞として理解されるが、この訂正に従えば、「福德をなさない人達」、「福德をなした人達」を意味することになる。Tib. を見てみると、この偈頌は次のように訳されている。

bsod nams dag ni bya dgos te//bsod nams ma byas sdug bsgal 'gyur//  
bsod nams dag ni byas pa yis//jig rten 'di dang pha rol dga'//

「福德はなされるべきであって、福德をなさない人は苦しむことになる。福德をなす人は、この世とあの〔世〕とで楽しむ」(D. 165a1; P. 153a4-5)

これによると、問題の語はいずれも「人」を意味し、スパイエルの訂正を支持しているので、今はこの訂正に従って翻訳する。また漢訳ではそれぞれに「無福遭苦厄」(p. 54c2), 「若有修福者」(p. 54c3) という訳を与えている。

ている同志マハーカーシャパ<sup>21)</sup>の鉢を天の甘露で満たした。同志マハーカーシャパの方も「負けじと」鉢を下に向けては、「その」飲食物を捨てていった。比丘達はこの出来事を世尊に告げた。世尊は言われた。

「では「お前達に」鉢の蓋を持つことを許そう」と<sup>22)</sup>。

「しばらくすると」辺りで声が上がった。

「誰それという都城の洗濯婦は聖者マハーカーシャパに重湯を施し、そして彼女は「死後」兜卒天衆に生まれ変わったぞ」と。

コーサラ国のプラセーナジット王は、

「誰それという都城の洗濯婦が聖者マハーカーシャパに重湯を施し、そして彼女は「死後」兜卒天衆に生まれ変わったぞ」

と聞いた。そして聞き終わると、世尊がいらっしゃる所に近づいた。近づくと、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に座った。世尊は、一隅に座ったコーサラ国のプラセーナジット王を、[85]法話によって教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられた。法話によって「王を」様々な仕方で教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられると、「世尊」は沈黙された。その時、コーサラ国のプラセーナジット王は座席から立ち上がると、上衣を右肩に懸け<sup>23)</sup>、世尊に向かって合掌礼拝すると、世尊に次のように言った。

「世尊は、七日間、聖者マハーカーシャパのために「我が屋敷内で」食事されることを私にお許し下さい」と。

世尊はコーサラ国のプラセーナジット王に沈黙を以て同意された。その時、コーサラ国のプラセーナジット王は世尊が沈黙を以て同意されたのを知ると、世尊のもとから退いた。

さてコーサラ国のプラセーナジット王は、その同じ日の夜、清浄で美味なる硬・軟「二種」の食物を用意すると、次の日の朝「早く」起きて「世尊と比丘達の」座席を

21) Skt. は mahākāśyapa (Divy. p. 84. 19; MSV p. 83. 18) とし、漢訳も「大迦攝波」(p. 54c5) としているが、Tib. は 'od srung「カーシャパ」(D. 165a2; P. 153a6) とし、mahā の訳を欠いている。

22) この辺りのストーリー展開は律のそれに酷似している。即ち、ある出来事が起こり、それを見聞していた比丘達はその出来事を世尊に告げると、それを聞いた世尊はその出来事を考慮し、比丘の生活に関して「何々することを許す」、或いは「何々すれば突吉羅に陥る」とする用法は律の健度部に特有なものであり、また「許す」の原語も anujānāmi であって、Pāli のそれと一致していることから、これも Divy. の説話が MSV から抜き取られたことを傍証する用例と言えよう。両者の関係に関しては、拙稿「The Relation between the Divyāvadāna and the Mūlasarvāstivādinaya—The case of Divyāvadāna Chapter 31—」(『印度学仏教学研究』39-2, 1991, pp. 17-19)、及び『ディヴィヤ・アヴァダーナ』にみられる律典的記述(『仏教論叢』36, 1992, pp. 7-11)を参照されたい。

23) Tib. だけがここに pus mo g-yas pa'i lha nga sa la btsugs te「右膝の皿を地面につけて」(D. 165a7; P. 153b3) という一節を置いている。

設け、水瓶を設置すると、世尊のもとに使者を送り、時を告げさせた。

「大徳よ、お時間です。食事の用意が出来ました。世尊は今が〔お出かけになる〕時間であるとお考え下さい」と。

すると、世尊は午前中に衣を身に纏い、衣鉢を持つと、比丘衆に取り囲まれ、比丘僧伽に敬われながら、コーサラ国のプラセーナジット王が食事を用意した場所に近づかれた。近づかれると、〔世尊〕は比丘僧伽の前に設けられた座に座られた。その時、コーサラ国のプラセーナジット王は、仏を上首とする比丘僧伽〔全員〕が心地よく座り終えたのを確認すると、清浄で美味なる硬・軟〔二種〕の食物によって手ずから〔世尊を〕喜ばせ、満足させた。その時、或る乞食が心を浄らかにしながら<sup>24)</sup>長老達の〔座っている〕場所に立つ〔て考え〕た。

〈あの王様は福德〔の果報〕を自分の眼ではっきり確かめ、自らの福德の果報に安住されているのに、〔その〕福德に満足せず、〔今また世尊に〕布施をされ、福德を積んでおられる〉

その時、コーサラ国のプラセーナジット王は、清浄で美味なる硬・軟〔二種〕の食物によって手ずから様々な仕方では陀を上首とする比丘の僧伽を喜ばせ、満足させた後、世尊が食事を終え、手を洗って、鉢を片付けられたのを確認すると、一段低い席を取り、法を聞くために世尊の前に座った。すると世尊は言われた。

「大王よ、〔私〕は誰の名前で〔汝のなした食事の〕布施〔の果報〕を廻向しようか<sup>25)</sup>。汝の〔名前で〕か、或いは汝よりも更に多くの福德を生じた者の〔名前で〕か」と。

王は考えた。

〈世尊は私の〔布施した〕食事を召し上がられたのだ。〔86〕他の誰が私よりも更に多くの福德を生ずる事など出来ようぞ〉

このように考えると、〔王〕は言った。

「世尊よ、私よりも更に多くの福德を生じた者がいるならば、世尊はその者の名前

24) ここでも再び *cittam abhiprasādayaṃs* (p. 85.21) という表現が使われているが、ここでの「心を浄らかにすること」の功德は、プラセーナジット王が釈尊を一週間食事に招待することの功德よりも大きいものと見なされている。

25) 「廻向」と和訳した言語は *daṣṣiṇām ā√dis* であり、Divy. では *daṣṣiṇādeśanā* という形も用いられる。「廻向」の原語は *pari√nam* の方が一般的かも知れないが、この語も同じ意味で使われていると見てよい。「廻向」とは、施主が施した布施の果報をその施主以外の者に指示することであるから、まさにこの説話のようなケースにピッタリである。釈尊在世当時からこのような廻向の作法が行われていたのかは更に詳細な研究が必要であろうが、大乘仏教では重要な位置を占める思想であり、興味深い用例といえよう。なお漢訳ではこれを「施願」(p. 54c26) や「呪願」(p. 54c27) と訳している。

で布施〔の果報〕を廻向して下さいませ」と。

そこで世尊は〔その〕乞食の名前で布施〔の果報〕を廻向された。このようなことが六日間も続いたのである。六日目になると<sup>26)</sup>、王は頬杖をついて物思いに耽ってしまった。

〈世尊は私の〔布施した〕食事を召し上がられたのに、乞食の名前で〔私の〕布施〔の果報〕を廻向された〉と。

大臣達は〔落ち込んでいる王〕を見た。彼らは語った。

「王よ<sup>27)</sup>、どうして〔王〕は頬杖をついて物思いに耽っておられるのですか」と。王は言った。

「お前達よ、どうして考え込まずにおれようか。この度、かの世尊は私の〔布施した〕食事を召し上がられたのに、〔あんな〕乞食の名前で〔私の〕布施〔の果報〕を廻向されたのだからな」と。

そのうち、一人の年長の大臣が言った。

「心配なさいませ。明日、我々は世尊が王御自身のお名前で布施〔の果報〕を廻向されるように取り計らいましょう」と。

〔大臣〕達は召使の者達に命令した。

「明日、お前達は美味しい食物を用意せよ。しかも沢山準備するのだ。〔その〕半分を比丘達の鉢の中に落とし、〔残りの〕半分は地面に〔落としても大丈夫な〕くらいにな」と。

次の日、大臣達は沢山の美味しい食物を用意した<sup>28)</sup>。その後、仏を上首とする比丘僧伽が心地よく座り終えると、食事を出しはじめた。半分は比丘達の鉢に、〔また残りの〕半分は地面に落としていったのである。すると乞食達は地面に落ちた〔食物〕を拾おうとして走り寄ってきたが、彼らは給仕達に行く手を阻まれた。そこで乞食達は

26) Divy. には *tato 'nyadivase* (p. 86. 5) とあり、このまま読むと、「その次の日」、即ち「七日目」を意味し、日にちが合わなくなってくるのでこの読みでは具合が悪い。そこで MSV を見てみると、*ṣaṣṭhe divase* 「六日目に」 (p. 85. 11) とあり、こちらの方が文脈からして相応しい読みと言える。Tib. も *nyi ma drug pa la* 「六日目に」 (D. 166a1; P. 154a4) としているので、原典の *tato 'nyadivase* を *ṣaṣṭhe divase* に改める。

27) Divy. では *kim arthaṃ kare kapolaṃ dattvā* (p. 86. 8) とあり、「王よ」という呼びかけが欠けている。MSV は *kim arthaṃ deva kare kapolaṃ dattvā* (p. 85. 13-14) としている。Tib. も *lha ci'i slad du phyag la zhal gtad te* 「王よ、どうして頬杖をついて」 (D. 166a2; P. 154a5) とあるし、文脈からしてこの語は必要であるから、*deva* を補って訳する。

28) Skt. はいずれも *prabhūta āhāraḥ sajjikṛtaḥ prāṇitaś ca* (Divy. p. 86. 16-17; MSV p. 85. 21) とするが、Tib. では *kha zas ches bsod pa dang ches rab tu mang ba bshams te* 「より美味でより多くの食物を用意して」 (D. 166a4-5; P. 154a8) としているが、文脈からすれば、この読みの方が相応しいと言えよう。漢訳も「倍加」 (p. 55a5) とし、Tib. の読みに一致する。

語った。

「我々のように〔飢えに〕苦しめられ、〔食を〕求めている者は他にも〔沢山〕おります。もしもかの王の〔城〕内に要らなくなった〔食物〕が沢山あるのなら、〔それを地面に落とすような事はせず、〕どうして〔我々に〕恵んで下さらないのですか。〔食物〕を食べずに捨てて何になるというのです」と。

その乞食は心を取り乱してしまったので、以前のように心を淨らかにすることが出来なかった<sup>29)</sup>。その後、王は仏を上首とする比丘僧伽に食事を出し終えると、

〈〔世尊〕は私の名前で布施〔の果報〕を廻向されないであろう〉

と考え、布施〔の果報を世尊が誰に廻向するか〕を聞かぬまま、〔自分の部屋に〕引き籠もってしまった。その後、世尊は〔次のように詩頌を唱えながら〕コーサラ国のプラセーナジット王の名前で布施〔の果報〕を廻向されたのである。

「象・馬・車・歩兵軍を率いて〔大地に〕君臨する〔王〕の賑やかな町を見よ。

〔87〕〔その果報〕は粗雑で塩気のない麦団子の力によるものなり」(5)<sup>30)</sup>

その時、同志アーナンダは世尊に次のように言った。

「大徳よ、世尊は何度も何度もコーサラ国のプラセーナジット王のお屋敷で食事され、〔王の〕名前で布施〔の果報〕を廻向されましたが、〔私〕はいまだかつて〔世尊が〕そのように布施〔の果報〕を廻向されたのを聞いたことがありません」

世尊は言われた。

「アーナンダよ、お前は、コーサラ国のプラセーナジット王の〔布施した〕塩気のない麦団子に関する業の一連〔の話〕(karmaploti)を聞きたいかね」

「大徳よ、〔今や〕その時です。善逝よ、〔今や〕その時です。世尊は、コーサラ国

29) 「心を淨らかにすること」の功德は既に指摘したが、この対極にあるのが「心を汚すこと(怒りの心を起こすこと)」であって、原語は *cittam pra√duṣ* が考えられる。Divy. では「心を淨らかにすること」の功德と並んで、「心を汚すこと」の罪の大きさも説かれている。Divy. 第15章では釈尊とウパーリとの対話の形式でこの問題が取り上げられている。ウパーリの「どのような場合に福德の損害や損失があるのですか」という質問に対して、釈尊は「同行者が同行者に対して邪悪な心を起こす場合である」とし、次のように締めくくられている。  
*tasmāt tarhi te upālinn eva śikṣitavyam yad dagdhasthūṇāyā api cittam na pradūṣayiṣyāmaḥ* prāḡ eva savijñānake kāye (Divy. p. 197. 24-26)  
 「それ故に、ウパーリよ、汝らはこのように学び知らねばならない。『〔我々〕は黒こげの柱に対してさえ怒りの心を起こしてはならない。有識身(生き物の身体)に対してはなおのことである』[と]」

30) Divy. ではこれを偈頌として校訂していないが(p. 86. 28-87. 2)、これは偈頌であり、MSV (p. 86. 11-12), Tib. (D. 166b1-2; P. 154b4-5), 漢訳 (p. 55a15-16) のいずれもそのように理解している。

のブラセーナジット王の「布施した」塩気のない麦団子に関する業の一連「の話」を説明して下さい。比丘達は世尊の「話」を聞いて、記憶するでありましょう」と。そこで世尊は比丘達に告げられたのである。

### 過去物語

かつて比丘達よ、或る村に長者が住んでいた。彼は「自分の家に」相応しい家から嫁を貰った。彼は彼女と遊び、戯れ、快楽に耽っていた。彼が「妻と」遊び、戯れ、快楽に耽っていると、子供が生まれた。その「子」は「大切に」育てられ、育まれて、賢くなった。やがてかの長者は妻に告げた。

「お前、我々には借金をもたらし財産を減らす「子供という」ものが出来てしまった。だから「金儲けのために、私」は商品を携えて外国に行くことにしよう」と。彼女は言った。

「あなた、そうして下さいな」と。

「こうして」彼は商品を携えて外国に行ったのだが、ちょうどその「外国」で命を落としてしまったのである<sup>31)</sup>。

「さて」かの長者は「元来」財産が少なかったので<sup>32)</sup>、その長者が<sup>33)</sup>「家に残していった」財産の類は底を突いてしまい、彼のその息子は苦しむ結果となった<sup>34)</sup>。かの

31) 原文には vyasanam āpannaḥ (Divy. p. 87. 20; MSV p. 87. 8) とあり、直訳すると「災難に陥ってしまった」となるが、Tib. ではこれを shi bar gyur to 「死ぬことになった」(D. 166b7; P. 155a4) とし、漢訳でも「命過」(p. 55a29) というように、災難の内容をより具体的に表現している。文脈からして、この場合の「災難」とは長者の「死」を意味し、また訳の上からも、ここではそのような表現を取った方が分かりやすいので、意識しておく。

32) Skt. はいずれもここを alpapariccheda (Divy. p. 87. 20; MSV p. 87. 8) としているが、pariccheda は「分離・正確な判断・決定・章」等を意味し、これでは意味が通じない。Tib. を見ると、ここは chen po mi bdog ba zhig bas 「財産が少なかったので」(D. 166b7; P. 155a4) とし、漢訳も「有少本」(p. 55a29) とあって、文脈に沿った訳になっている。これから考えると、この pariccheda は paricchada の誤りと考えられるので、そのように改読して翻訳する。

33) Divy. には tasya gr̥hapater (p. 87. 21) とあるが、ここを MSV は tasya gr̥he 「彼の家には」(p. 87. 8) とする。Tib. は de'i khyim gyi 「彼の家の」(D. 166b7; P. 155a4) とし、漢訳も「家有少本」(p. 55a29) としているので、いずれも MSV の読みを支持しているが、tasya gr̥hapater でも読めなくはないので、今はこのまま読むことにする。

34) ここから Divy. と MSV との間ではストーリーの展開に違いが見られる。即ち、MSV を見てみると、tasya gr̥hapater vayasyakah/ sa tenoktaḥ/ mamāpi tvam putrah/ mama kṣetram pratipālaya/ aham tava bhaktena yogodvahanam karomīti/ sa tasya kṣetravyāpāram karttum ārabdhah 「その長者には友人がいたが、彼はその「子」に言った。『お前の父さんと私とは友人であるから』お前は私の息子でもある。私の畑「仕事」を手伝わないか。『そうすれば』私はお前に食事を出して生活の面倒を見て上げよう』と。『そこで彼は「父の友人」の畑「仕事」を手伝いはじめたのである』(p. 87. 9-11) として、Divy. のように母親が自分の息子と夫の友人の間に介在せず、長者の友人が直接その子と交渉しているのである。Tib. を見てみると、khyim bdag de'i sten grogs shig yod pa des de la smras pa/ khye'u kho bo'i zhing las ↗

長者には友人がいたが、彼はその子の母に言った。

「あなたの息子に〔私の〕畑仕事を手伝わせなさい (kṣetram rakṣatu)。〔その代わり〕私は十分な食事を以て彼の生活の面倒は見るつもりだ」

「そうして下さいませ」

〔こうして〕その〔子〕は彼の畑〔仕事〕を手伝いはじめ、〔彼〕は十分な食事を以てその子の生活の面倒を見はじめた。

しばらく経った或る日、新月〔の日〕が近づいた。その子の母は考えた。

〈今日、長者の奥さんは、〔88〕友人・親戚・親類の者達と共に、沙門やバラモン達に食事を出すことに精を出されるでしょう<sup>35)</sup>。〔食事の〕時間になったら出掛けましょう。〔長者の奥さんからおこぼれを少し頂戴し、その〕食物をあの子に運んでやりましょう〉と。

彼女は〔食事の〕時間になると〔長者の家に〕行き、〔長者の奥さんに〕その旨を知らせた。〔すると〕彼女は怒って言った。

「〔私〕はまだ沙門やバラモン達に、或いは親類の者達に〔も食物を〕差し上げていないのに<sup>36)</sup>、〔どうして彼らより〕先に使用人に〔食物を〕上げられましょうか。とにかく今日〔の食事〕はお預けです。〔その代わり〕明日、二倍〔の食事〕を上げましょう」と。

その後、その子の母は考えた。

\\dag byos shig dang ngas khyod kyi zan sbyar bar bya'o// des de'i zhing las dag bya bar brtsams nas「その長者には親友がいたが、彼はその〔子〕に言った。『坊や、私の畑仕事を手伝いなさい。そうすれば、私はお前の食事を用意して上げよう』。その〔子〕は彼の畑仕事を手伝いはじめたので」(D. 166b7-167a1; P. 155a4-5) とし、若干の相違はあるが、ほぼ MSV の読みと一致する。ところが漢訳をみると、「有隣長者。告其母曰。爾子與我作。當濟衣食。母便授與。長者即使於田種処」(p. 55b1-2) とあり、こちらは Divy. の読みと一致している。

35) Divy. は gr̥hapatipatnī suhr̥tsambandhibāndhavaīḥ saha śramaṇabrāhmaṇabhojanena vyagrā bhaviṣyati (p. 87. 27-88. 2) とするが、MSV では gr̥hapatipatnī suhr̥tsambandhibāndhavaśramaṇabhojane vyagrā bhaviṣyati「長者の奥さんは、友人・親戚・親類・沙門に食事を出すのに忙しいでしょう」(p. 87. 13-14) となっており、suh̥rtsambandhibāndhava の役割が両方で食い違っている。即ち、Divy. に見られる「友人・親戚・親類」は長者の妻と一緒に沙門に食事の接待をすることになっているが、MSV では沙門と同じく長者の妻から食事の接待を受ける側に回っているのである。Tib. は khyim bdag gi chung ma mdza' bshes dang gnyen dang nye du dang/ dge sbyong dang/ bram ze'i skye bo rnam zan sbyin bas brel bar 'gyur gyis「長者の奥さんは友人・親戚・親類・沙門・バラモンといった人々に食事を出すのに忙しくなるから」(D. 167a2; P. 155a6) とし、MSV の読みと一致する。漢訳も「今此長者。明旦家中。施設沙門婆羅門。供待賓客」(p. 55b3-5) とし、MSV の読みに近いのである。また MSV は Divy. に見られる brāhmaṇa を欠く。

36) この表現から考えると、親戚の者達は食事を出される方であるから、注35) の読みは MSV の方が相応しいかもしれない。

〈我が息子を飢えさせてはならない〉と。

彼女は自分用に塩気のない麦団子を用意していたが、彼女はそれを持って〔息子のもとへ〕行った<sup>37)</sup>。その子は遠くから〔母〕を見た。彼は言った。

「母さん、美味しいもの、美味しいものは何かないの」

彼女は言った。

「息子よ、毎日〔頂ける食物〕さえ今日は貰えないのよ。私は〔何時も〕自分用に塩気のない麦団子を用意しているんだけど、それを持って私はここにやって来たのよ。さあ、これをお食べ」と。

彼は言った。

「じゃあ、〔それを〕置いて帰って下さい」と。

彼女は〔それを〕置くと、立ち去った。

——ところで、諸仏が〔まだこの世に〕現れていない時、貧しくて困った者達を哀れみ、人里離れたところで寝たり、座ったり、食事をしたりし<sup>38)</sup>、世間に於いて唯一布施されるに相応しい独覚達が世に現れることになっている。——

37) ここも Divy. と MSV との間ではストーリーの展開に違いが見られる。即ち、この後 MSV には *putrasya vistareṇa yad gr̥hapatnyābhihitam tat sarvam ākhyāya katayati/ iyaṃ mayā ātmīyā alavaṇikā kulmāṣapiṇḍikā ānītā/ etāṃ paribhūṃkṣveti* 「〔母〕は息子に、長者の奥さんに言われたことを総て詳細に告げると、〔次のように〕言った。『自分用に作っておいた塩気のない麦団子を持ってきてやったよ。さあ、これをお食べ』と」(p. 87. 21-88. 1) とあり、下線部分が Divy. には存在しない。その代わりに、*tena dārakeṇa dūrata eva dr̥ṣṭā/ sa kathayati/ ambāsti kiṃcin mr̥ṣṭam mr̥ṣṭam/ sā kathayati/ putra yad eva prātidāivasikam tad apy adya nāsti mayātmāno 'rthe 'lavaṇikā kulmāṣapiṇḍikā sādhitā tām ahaṃ gr̥hitvāgātā etāṃ paribhūṃkṣveti* (p. 88. 8-12) という下線を施した Divy. の文章が MSV には存在しないのである。また下線部分以降も内容的には同じであるが、両者は若干違った表現を取っている。そこで Tib. を見てみると、更に面白いことが分かる。即ちここに相当する Tib. には *des de khyer nas zhing thog tu song pa dang khye'u des de rgyang mi ring ba zhis nas mthong nas des smras pa/ yum zhim po cung zad ma mchis sam/ des smras pa/ bu de ring ni zan nar ma gang yin pa nyid kyang med dol/ yum ci ste lags/ des bu la khyim bdag gi chung ma ji skad du zer ba de dag thams cad rgyas par bsnyad nas zan dron lan tsvas ma btab pa 'di yang kho mo nyid kyis khyer te 'ongs kyis/ bu 'di zo shig ces smras pa dang* 「彼女はそれを持って畑の方に行き、その子は彼女を遠くないところから見ると、彼は言った。『母さん、美味しいものは少しもないのですか』。彼女は言った。『息子よ、いつもある食事も今日はないのよ』。『母さん、どうしてなのですか』。彼女は息子に長者の奥さんが言った通りのことを総て詳しく話すと、『この塩気のない麦団子を自分で持ってきたから、息子よ、これをお食べなさい』と言うと」(D. 167a4-5; P. 155a8-155b2) となっている。即ち、下線を施した所が MSV には存在しない部分、点線を施した所が Divy. には存在しない部分、そして斜体で示した所がいずれにも存在しない部分ということになる。即ち、Tib. はそれぞれの Skt. テキストにない部分を総て含んでいることになる。

38) Skt. はいずれも *prāntāṣayanāsanabhaktā* (Divy. p. 88. 14-15; MSV p. 88. 3) とするが、Tib. は *mtha'i gnas mal la dga' ba* 「人里離れたところで寝たり座ったりすることを楽しみ」(D. 167a6; P. 155b3) とし、Skt. の *bhaktā* を名詞の「食事」ではなく、形容詞の「享受する」の意で理解しているようである。漢訳も「樂住空閑」(p. 55b14) とし、Tib. と同じ理解を示している。



さて或る独覚がその場所にやって来た。その〔子〕は、かの〔独覚〕が〔人々の〕心身を清浄にし、落ち着いた立ち居振る舞いをしているのを見た。彼は考えた。

〈私は、このような布施を受けるに相応しい立派な人を供養しなかったら、そのことによって、きっと私はそれに見合った〔悪い〕状態に陥るだろう。もしも彼が私から〔この〕塩気のない麦団子を受け取って下さるのであれば、私は彼に差し上げよう」と。

するとかの独覚は、その貧しい〔子〕の心を〔自分の〕心で知ると、〔彼に〕鉢を差し出した。

「坊や、もしも君に残〔飯〕があれば、この鉢に入れてくれないかい」

すると彼は激しい浄信を起こし、その塩気のない麦団子をその独覚に差し出したのである。

## 連 結

「比丘達よ、どう思うか。その時、その折りに、貧しい男だったのは、他ならぬこのコーサラ国のプラセーナジット王だったのである<sup>39)</sup>。彼は独覚に塩気のない麦団子を差し出したが、この業によって〔彼〕は三十三天で六回も王権・主権・権力を欲しいままにし、この同じシュラーヴァスティーにおいては六回もクシャトリアの灌頂王となり、またその同じ業の残りによって、今〔この世において〕もクシャトリアの灌頂王となったのである。〔89〕その団子〔の果報〕が彼に熟したのである。私はこれを念頭において〔こう〕言ったのだ。

『象・馬・車・歩兵軍を率いて〔大地に〕君臨する〔王〕の賑やかな町を見よ。

〔その果報〕は粗雑で塩気のない麦団子の力によるものなり』と」(6)

## 現在物語Ⅱ

〔その時〕辺りで人々が歓声を上げた。

「世尊は、プラセーナジット王<sup>40)</sup>の〔布施した〕塩気のない麦団子に関する一連〔の話〕を説明されたぞ」と。

39) Tib. には de'i tshe de'i dus na「その時、その折に」(D. 167b2; P. 155b6)とあり、ここでも Skt. の tena kālena tena samayena を重ねて訳出している。

40) Divy. では kausala の語を欠き (p. 89. 4-5)、ただ「プラセーナジット王」とするのみであるが、MSV では rājñah prasenajitah kosalasya (p. 88. 21-22) とし、Tib. もこれに同じく ko sa la'i rgyal po gsal rgyal「コーサラの王プラセーナジット」(D. 167b4; P. 156a1) とする。

ブラセーナジット王<sup>41)</sup>も〔その声を〕聞いた。彼は世尊がいらっしゃる所に近づいた。近づくと、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に座った。世尊は、一隅に座ったコーサラ国のブラセーナジット王を<sup>42)</sup>、法話によって教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられた。法話によって〔王を〕様々な仕方て教示し、鼓舞し、励まし、勇気づけられると、〔世尊〕は沈黙された。その時コーサラ国のブラセーナジット王は、座から立ち上がると、上衣を右肩に懸け<sup>43)</sup>、世尊に次のように言った。

「世尊は三ヶ月間、僧伽と共に、衣・食事・臥具・座具<sup>44)</sup>・病気の時に使う薬といった資具〔の供養を私から受けること〕を私にお許し下さい」と。

世尊は沈黙を以てコーサラ国のブラセーナジット王に同意された。かくしてコーサラ国のブラセーナジット王は、三ヶ月の間、仏陀を上首とする比丘僧伽に対して百味の食事を出し、またそれぞれの比丘に百千もの衣を提供した。更に〔王〕は一千万もの油壺を用意し、灯明の環 (dīpamālā) を布施しようとしたのである。その食事と供養とに対して大歓声が沸き起こった。

その時、非常に困しんでいた或る町の洗濯婦がいたが、彼女は中が窪んだ容器<sup>45)</sup>を手にして物乞いしながら〔辺りを〕うろついている途中、〔その〕甲高い声・大きな声<sup>46)</sup>を聞いた。そして聞き終わると、〔人に〕尋ねた。

「皆さん、あの甲高い声・大きな声は何なのですか」と。

他の者達は言った。

「コーサラ国のブラセーナジット王が、三ヶ月の間、仏陀を上首とする比丘僧伽に

41) ここも先ほどと同じく、Divy. では *kausala* の語を欠くが (p. 89. 6), MSV (p. 89. 1) と Tib. (D. 167b5; P. 156a2) にはこれが見られる。

42) Divy. (p. 89. 8) と MSV (p. 89. 3) には *rājānam prasenajitam kauśalam* (MSV; *kosalam*) とあるが、Tib. は *rgyal po gsal rgyal la* 「ブラセーナジット王」 (D. 167b5-6; P. 156a3) とし、ここでは Tib. が「コーサラの」を欠く。

43) ここに Tib. では *pus mo g-yas pa'i lha nga sa la btsugs te/ bcom ldan 'das gang na ba der logs su thal mo sbyar ba btud nas* 「右膝の皿を地面に着けて、世尊のいらっしゃる方を向いて合掌礼拝すると」 (D. 167b6-7; P. 156a4) という Skt. には見られない一節が存在する。漢訳にも「合掌恭敬。双膝著地」(p. 55c1-2) とあるので Tib. に一致するが、漢訳では地面に着けたのは両膝になっている。注23) 参照。

44) Tib. は Skt. の *śayanāsana* (Divy. p. 89. 14; MSV p. 89. 6) に相当する訳語を欠いている (D. 167b7; P. 156a5)。

45) Divy. は *kroḍamallaka* 「中が窪んだ容器」(p. 89. 21) とするが、これを MSV は *khaṇḍamallaka* 「壊れた容器」(p. 89. 13) とする。Tib. には *rdza'i chag dum* 「器の割れた破片」(D. 168a3; P. 156a8) とあるので、MSV に近い。漢訳はこの訳語を欠く。

46) Divy. には *uccaśabda* (p. 89. 21) だけしかないが、MSV はこれに *mahāśabda* (p. 89. 13) を加えている。Tib. にも *sgra chen po dang sgra mthon po* 「大きい声と甲高い声とを」(D. 168a3; P. 156a8) とある。この後すぐに洗濯婦が喋った言葉の中には *uccaśabda* と *mahāśabda* とがセットで使われているから、ここでは *mahāśabda* を補って訳す。漢訳はただ「喧聲」(p. 55c12) とする。

対して食事を出し、またそれぞれの比丘に百千もの衣を提供し、更に一千万もの油壺を用意して、灯明の環を布施しようと用意したのですよ」と。

すると、その町の洗濯婦は次のように考えた。

〈コーサラ国のブラセーナジット王は〔以前になした〕福德に満足せず、今なお布施をして福德を積まれている。[90] さあ私も何処かで〔油を〕用意し、世尊に灯明の布施をしましょう〉と。

彼女は鉢の破片<sup>47)</sup>に少量の油を乞い求めて灯明を灯し、世尊が散歩される場所に献じると、〔世尊の〕足下に平伏して誓願を立てた。

「ちょうどシャーキャムニ世尊が、人の寿命が百歳の時代に、シャーキャムニという名の大師として世に出現されたように、私もこの善根によって、人の寿命が百歳の時代に〔あなたと〕同じシャーキャムニという大師となりますように。また、ちょうどあなたに (asya) シャーリプトラとマウドガリヤーヤナという最上なる二人組・賢明なる二人組が〔弟子となり〕、アーナンダが侍者、シュッドーダナが父、マハーマーヤーが母<sup>48)</sup>、カピラヴァストゥが都城<sup>49)</sup>、〔そして〕ラーフラと言う美しい王子が息子<sup>50)</sup>となられたように<sup>51)</sup>、<sup>52)</sup> 私にもシャーリプトラとマウドガリヤーヤナという最上なる二人組・賢明なる二人組が〔弟子となり〕、アーナンダが侍者、シュッドーダナが父、マハーマーヤーが母、カピラヴァストゥが都城、〔そして〕ラーフラと言う美しい王子が息子となりますように。また、ちょうど世尊が遺骨を分配して涅槃に

47) Skt. はいずれも khaṇḍamallaka (Divy. p. 90. 2; MSV p. 90. 2) という語を用いているが、ここでは Tib. は注45) で見たのとは違った訳語 snod gyo ral「壊れた器」(D. 168a5; P. 156b3)を使っている。漢訳は「乞器」(p. 55c15)とする。

48) Tib. には yum lha mo sgyu 'phrul chen mo「母は王妃マハーマーヤー」(D. 168a7; P. 156b5)としているが、Divy. (p. 90. 8)とMSV (p. 90. 7)とは mātā mahāmāyā とするだけで、下線に相当する Skt. は存在しない。

49) Divy. にはこの部分に相当する Skt. が存在しないが (p. 90. 8-9), MSV はここに kapilavastu nagaram「都城はカピラヴァストゥで」(p. 90. 8)を置く。Tib. も同じく grong khyer ser skya'i gzhi lags pa「都城はカピラヴァストゥであって」(D. 168a7; P. 156b5), 漢訳も「城名劫比羅」(p. 55c19)としているし、また Divy. 自身この後の同様な表現ではこれに相当する一節が見られるので (Divy. p. 90. 30), ここではこれを補って訳す。

50) MSV は rāhulabhadraḥ kumāraḥ (p. 90. 8) とし, putra の語を欠く。Tib. は sras gzhon nu sgra gcan zin bzang po「息子は吉祥なるラーフラ王子」(D. 168a7; P. 156b5) とし, putra の訳が見られるが、漢訳は「賢子羅怛羅」(p. 55c19-20) とし, MSV と同じく putra の訳語を欠いている。

51) Tib. の順番に混乱が見られる。即ち, MSV (p. 90. 7-8) と漢訳(p. 55c19-20)とは父・母・都城・息子の順番に説かれているが, Tib. では父・母・息子・都城 (D. 168a7; P. 156b5) となっている。このような順番の混乱はこの後でも見られる。

52) このあと Divy. には yathā を受ける tathā 乃至は evam 以下の文章が抜けている。これに相当する部分は MSV (p. 90. 8-11), Tib. (D. 168a7-168b1; P. 156b5-6), 漢訳 (p. 55c20-21) の各資料に見られるし、またないと不自然な文章になるので、今は MSV から補って翻訳する。

入られたように、私もまた遺骨を分配して涅槃に入ることが出来ますように」と。  
しばらくすると、その総ての灯火は消えていたが、彼女によって灯された灯明〔だけ〕は依然として燃えていた。

——一般に、諸仏・諸世尊が横になられない間は、諸仏・諸世尊の侍者達も横にならないことになっている。——

その時、同志アーナンダは考えた。

〈仏・世尊が明るい所でお休みになることは、あり得ず、あってはならない。いざ私は灯火を消すことにしよう〉と<sup>53)</sup>。

彼は手で〔扇いで灯火を〕消そうとしたが、〔消〕せなかった。それから〔彼〕は、衣の裾で、更には扇で〔扇いで〕も、それでも消せなかった。そこで世尊は同志アーナンダに告げられた。

「アーナンダよ、何事だ」

彼は言った。

「世尊よ、私は〈仏・世尊が明るい所でお休みになるあり得ず、あってはならない。いざ私は灯火を消すことにしよう〉と思ったのです。そこで私は手で消そうとしましたが、〔消〕せませんでした。それから衣の裾で、更には扇で〔灯火を消そうと〕もしましたが、それでも〔消〕せなかったのです」

世尊は言われた。

「アーナンダよ、徒勞に終わるだけだ。たとえヴァイランバカという暴風が吹き荒れたとしても、〔その灯明を〕吹き消すことは出来ない。ましてや、手、衣の裾、或いは扇など言うに及ばぬ。何故なら、この灯明はかの婦人が大変な心の造作を以て (mahatā cittābhisamkāreṇa) 灯したからだ。アーナンダよ、人の寿命が百歳の時代に、かの婦人はシャーキャムニと言う名の如来・阿羅漢・正等覚者となり、彼にはシャーリプトラとマウドガリヤーヤナという最上の二人組・賢明なる二人組が〔弟子となり〕、比丘アーナンダが侍者、カピラヴァストゥが都城、シュッドーダナが父、マハーマヤーが母、[91]〔そして〕ラーフラと言う美しい王子が息子となるであろう<sup>54)</sup>。彼はまた遺骨を分配して涅槃に入るであろう」と。

53) この後、MSV では Divy. の p. 90.16-21に相当する部分を欠いている。ここではアーナンダが自分のしたことを世尊に告げているが、全く同じ表現が繰り返されているため、MSV の書写者がこの部分をスキップしたものと考えられる。

54) ここの先ほどと同じく、Tib. の順番に混乱が見られる。即ち Divy. (pp. 90.30-91.1) と MSV (p. 90.4-5) と漢訳 (p. 56a8-9) とは父・母・都城・息子の順で説かれているが、Tib. (D. 169a1-2; P. 157a7-8) のみ都城・息子の順番をひっくり返し、父・母・息子・都城とする。この Tib. の順番の方が自然な様に思われるが、その他の資料ではそうっていない。

世尊がこのように言われると、かの比丘達は歓喜し、世尊の語られたことに満足した<sup>55)</sup>。

以上、吉祥なる『ディヴィヤ・アヴァダーナ』における「ナガラ・アヴァランビカー・アヴァダーナ」第7章。

---

55) Divy. ではここで話を終えているため、経典を締め括る定型句である *idam avocad bhagavān ātmanasas te ca bhikṣavo bhagavato bhāṣitam abhyanandan* (p. 91. 2-3) がここに置かれているが、これに相当する文章は MSV にも Tib. にも漢訳にも存在しない。それは Divy. の説話が MSV から抜き取られたためであると考えられる。